

最後の日

元暦二年三月二十四日。

源平二氏は西海壇の浦にここを最後と戦っている。しかし、もう戦の数は決した。源氏の兵は平家の船に乗り移って来る。水夫どもはあるいは射殺され、あるいは斬殺されて、もう船は動かない。

「新中納言知盛の卿、小船にのりて急ぎ御所の御船に参らせ給ひて、世の中は今ばかりと覚え候。見苦しきものどもをば、みな海へ入れて、船の掃除めされ候へとて、掃いたり、拭いたり、塵ひろひ、舳艫に走りまはりて、手づから掃除し給ひけり。……」

二位殿（平清盛の妻）は、日頃より思ひ設け給えることなれば、金色のこぎぬ打ちかづき、ねり袴のそば高くとり、紳璽を脇にはさみ、宝剣を腰にさし、主上（安徳天皇）を抱き参らせて、我は女なりとも、敵の手にはかゝるまじ、主人のお供に参るなり、御志思ひたまはん人々は、急ぎつゞき給へとてしづくと舷へぞ歩み出でられける。主上今年は、八歳にぞならせおはします。御年のほどより遙かにねびさせ給ひて、御かたちいつくしく、傍も照り輝くばかりなり、御髪黒くゆらくと、御背中過ぎさせ給ひけり、主上あきれたる御有様にて、そもくあませ（あませとは尼御前のこと）我をば何地へ具して行かんとはするぞ、と仰せければ二位殿幼き君に向ひ参らせ、涙をはらくと流して、一

『君は未だ知し召され候はずや、先世の十善戒行の御力によりて、今万乗の主とは生れさせ給へども、悪縁にひかれて、御運既につきさせたまひ候ひめ。先づ東に向はせたまいて、伊勢大神宮に御暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて、西方浄土の来迎にあづからんと、誓はせおはしまして、御念仏候ふべし、此国はぞくさんのへんど（粟散の辺土）と申して、物憂き境にて候、あの波の下にこそ極楽浄土とてめでたき都の候、それへ具し参らせ候ぞ』と。

様々に慰め参らせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結ばせ給ひて、御涙におぼれ小さく美しき御手を合わせ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮へ御暇申させおはしまし、其後西に向はせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがて抱き参らせ、波の底にも都の候ぞと慰め参らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。

悲しきかなや、無常の春の風、忽に花の御姿をちらし、いたまじきかな、ぶんだんの荒き波、玉体を沈め奉る。……」（平家物語）

盛なる者は必ず衰える。

哀れ、平家の末路の華々しくもまた尊いことよ。

保元の乱この方、住みなれし花の都も、今は木曾の冠者義仲の粗野に荒されて、一門ごとごとく主上西海の御幸に随いたてまつる。

一の谷の戦にもやぶれ、屋島にも、宝駕ながくとどめさせられず、幾多の哀話をつづりつつも、壇の浦に潔く滅ぶ。

滅ぶものは滅ぶ。

しかもその滅ぶ日に従容として乱れず、自若としてその道を守るは、我が武士道の生命ではなかつたか。

我、盛んなるものを、必ずしもほめたええず、衰えるものを必ずしもさげすまず。治乱興亡は生死苦海の一時の相にすぎない。

栄えしものは如何にして栄えしか。衰えるものは如何にして衰えしか。その間に輝くものは何ぞ、そのすがたは如何に。

全て最後の日のすがたは悲劇である。そこに涙があり、血がある。

悲劇の中心は苦悩である。

詩もこれあるがために生れ、芸術もここに生命を持つ。

宗教にいたつては、苦の中に試練されず、苦の中より生み出されないものであるならば、それは一片の閑人の閑葛藤である。

平家の一族はことごとく、都を落ちた。

薩摩守忠度は、どこから帰つて来たのか、五六人の侍をつれて、五條の三位俊成卿の邸の前に立った。門は閉じられて開かない。落人がかへつたとて、何だか内はさわがしい様子、忠度は馬よりおりて、高らかに申される。

「外の着ではありませぬ。忠度、三位殿に申すべきことあつて、引かえしてまいりました。三位殿に是非お願いがあります。たとえ門は開かれずとも、この所まで御出で下さい。」

忠度とわかつて、門は開かれて対面される。

話の要点はこうである。

「御無沙汰のみでありました。いよいよ、君には帝都を出させたまひ、平家一門の運命もはやつきはてしました。つきましては、以前、勅撰の和歌集が出来るといふことを聞きましたが、生涯の面目に一首でものせて頂きたいと存じておりました。こんな乱世になつて、そのお沙汰がなくなつたことは嘆かわしいことであります。この後、世が静まつて、撰集の御沙汰がございましたら、ここに持参しました巻物の中に、日頃詠みおいた歌どもの中から、秀歌と思はれるもの百余首ほど書き集めてありますから、一首なりともおのせ下さるならば、後の世の思い出ともなりましょう。」とて巻物を出された。

俊成卿はこれを聞いて、「かかる忘れがたみどもを賜りました上は、ゆめ／＼疎略には致しませぬ、さてもさてもその心根、情も深う哀れも殊に勝れて、思はず涙いたしました。」と宣へば、

薩摩守は、「今はもう、屍を山野に曝しましょうとも、汚名を四海の波に流しましょうとも、浮世に思いおくこともありません。さればお暇申します。」

とて西の方に馬を急がせました。

今はのきわに、和歌を知る人に托して死出の旅につく心根、花の都の最後の日は悲しくも哀れである。

やがて『千載集』が撰ばれた時、よみ人知らずとして戴せられた一首は、忠度卿の歌であった。

さゞなみや 志賀の都は荒れにしを むかしながらの山ざくらかな

最後の日！ そこにももの本質と赤裸々な相が表われる。

「おちぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ」

盛んなる時に追従する者は多い。零落の日に共に手をとつて泣く人は少い。三百数十人の家中から、四十七士を出した赤穂藩は、それだけで万丈の気焔である。

承安四年、法然上人一たび黒谷をいでて、京都吉水に念仏易行の大道を宣べたもうや、その名声は日本国中に伝わった。念仏の大法は草の風になびくが如く、

「農夫がすきをふかむ、念仏をもつて田歌となし、

織女が糸を引く、念仏をもつてたてきぬとす。

鈴を鳴らす駅路には、念仏を唱えて鳥をと

船ばたをたゝく海上には、念仏を唱えて魚をつる。

雪月花をみる人は 西楼に目をかけ、

琴詩酒を弄ぶともがらは、西の枝の梨子を折る。」とか。

南北の僧徒とても人である。嫉妬の刃は、この吉水の上にむけられた。時も時とて、女官たちの出家は、はしなくも上の御憤にふれ、ついに吉水の教団はふみにじられて、念仏禁制の札は高くかゝげられた。

哀れ打ち首、流罪、大地の上は痛ましくも、ためされる日がきた。

法然上人を思ひ奉る弟子たちは上人をとひ、

「何とぞ、今しばらくの間、朝暮の御念仏をやめさせたまへ、しかれば事も静まるでございましょう。御老体ゆえに都に住はせ給はねば……………」と申しあげると、善慧坊その他の一座の人々に向かつて、

「汝らは経釈を見ないのか。たとい源空は之がために死刑に処せられるとも変ずることとはできない。よし我が舌は念仏を称えるによつて寸断さる事があつても、如何で念仏を止めることが出来ようか、考へても見よ。今日我が弘通する所の念仏は、まさにこれ大聖世尊の出世の本懐ではないか。十方恒沙の諸仏すでにこれを証誠し、善導大師は本願の念仏を往生の最安と教えたもうたではないか、我は今その流れをくむ身でありながらどうして念仏を行ぜないでいられるか。駅路はこれ聖者のゆく所である。配所はまた権化の住所である。憂いとすするに及ばず、悲みとするに足らない。

辺鄙^{へんび}は未だみ法に浴していない。流されることによつて辺鄙の群衆の濟度ができるならばこれにこしたことはない。これ悦びであつて悲しみではない。」

念仏は行者の生命である。

終日行ずれども自らの行を行ずるのではない。正覺の全生命は、行者の念仏の根底である。念仏の声のする所、そこそ如来のまします所である。

さはさりながら、愛別離苦は凡夫にとつては最大の苦惱である。

花が散るように、師も弟子も散つてゆく、吉水最後の日を思つて涙せぬものがあるうか。形の上で吉水教団には最後の日がきた。形がこわれた時、悪魔はものすごく笑つたであろう。

しかし眞実なるものは、その形の興亡を越えて生きぬく。

一切の人の上に死がくる。病が重くなる。

……借物も駄目、化粧も駄目、赤裸々な人間が横たわる。

名誉、地位、財産、そんなものが遠のく。

子供、妻、夫、親、友人、それらの手が届かぬ世界の門がひらく。

医者、看護婦、薬、食事、それが間にあわぬ。

たつた水数滴が唇をうるおす。

その最後の日に何があるう。

最後の日、寂しいけれどこの言葉は、私に深い内省を与えてくれる。そうして私にほんとうの生き方を教える。

アテネの街には、貧しい老哲人ソクラテスが

「徳を愛せよ。而して智識をのぞめ。」

と叫びつづけて歩く。彼の前には何者も眼中にない。ただ彼が信ずる神があるばかりだ。

汝自身を知れ！

神を信じよ。何故に金銭と名誉の事にのみ思い煩うや、智識を求めないか、眞の神に服従しないのか！

彼の舌端は火よりも熱い。

アテネの最高権威を握っている皮商人アニタスは、自分の権力の前には何者も頭を下げると信じていた。事実、彼の前に頭を下げぬ者とはなかった。しかるに彼を正面からこき下し、苦言を提してはぐからぬ者は、ソクラテス一人である。彼の子供の養育に対して、やくざものにすなと忠告しただけである。

アテネの怒りを買ったソクラテスは、アテネの大公会堂に引き出されて、市民から選ばれた五百人からの裁判官の前に罪をさばかれることになった。

ああ、何たる愚なる裁判ぞ！

七十歳をこえた哲人ソクラテスは無意味なる裁判の席にひき出された。

「アテネ市は今日、ソクラテスの罪状を決定するために、この裁判を開いたのである。かれが有罪であるか、無罪であるか、彼を死刑に処するか、放免するか。諸氏の裁判を求めよ。」

と裁判長が宣言する。まず被告の申し立てが聞かれた。ソクラテスは立った。彼の人格は少しも取り乱れない。沈着の態度には少しの変化もない。

「……諸君の裁判が私をかりに無罪にしてくれた所で、有罪とした所で、私のゆく道に変更はありません。」

おゝ、私のゆく道に変更はありません！

何たる強者の声ぞ。

そこへ全人格をあげての一本道が見える。世間の風模様くらいのことでは動かすことの出来ぬ真実の道がある。

この一本道に立つかぎり、富貴も淫する能わず、威武も屈することは出来ない。

「私は依然として叫ぶであります。アテネの人よ、私は真に諸君を尊敬します。また愛します。しかし私は諸君に服従するよりも神に服従します。諸君よ、私は將來、余命のある限り、力のある限り、偉大なるアテネの市民よ！ 諸君は何故に、金銭名譽の事のみを心に心を用いて、智識と眞理を求めることに努力しないか！ 正しい神を信じないか、と叫んでやまないであります。」

そこには妥協もなく哀願もない。憐みを乞うために一言も使わない。いゝえ、彼はこの死の幕のとなりに来つて猶、力強く権力と不正とを罵つて正義を主張する。こうした場合に権力は必ず、彼を虐げる。

「ソクラテスを死刑に処す。」

「死刑の宣告はつつしんで拝聴しました。」

彼の態度は変らない。怒りもなければ恐れもない。

「みな様には一個のソクラテスを殺して何になります。……私は老人です。長く生きる身ではありません。死刑にされて何のさしつかえがありません。ただ、私を死刑に処せられる皆様に一言聞いて頂きます。

死とは何ぞや、与えられた死とは何でしょう。ある者は死は無の世界だという。またある者はこの世からあの世への変化にすぎぬという。もし死が無意識の境地で、長い眠りだとすれば、死ぬことはまことに結構な事です。なぜならば永久なる一つの熟睡と同一だからである。これに反してもし死が、この世からあの世にゆく変化であつて、そこには昔の死者が全部存在するものならば、死ほど面白いことはない。

そこには正しい裁判官がおり、この裁判をあの世で再び受けることができるならば、それこそ私がお願いして行きたい旅行である。もしそこにオーピアスやホームー

というような死んだ偉人がいて、快談することができれば、私はどんな犠牲をはらつてもそこに行きたい。

然り！ もしこの説に偽りがないならば、私をして、何回でも死なしめよ！ 何回でも私はそこがなつかしい。私はそこでお智識を追うことができる。その裁判はこんなつまらぬことで死刑を与えるわけではない。

裁判官諸君！ 私の死を喜んで下さい、善人には如何なる場合でも、悪い結果が来るものではない。

最後にお願ひします。私の子孫がもし徳を愛することが富を愛することよりも弱かつた場合には、何卒彼らを罪して下さい。」

何たる公明正大ぞ！ 一言一句、ことごとく名言ではないか、宝玉ではないか。

公判は閉じられた。裁判官が皆ひきあげようとした時である。彼はかの有名な一句を叫んだ。

「今こそ別れる時が来た。

我らは各々定められた道をゆくのだ。

私は死の道に、

諸君は生きる道に、

しかしいづれがいゝかを知っている者は誰ぞー」

五百の市民、肅然として足をとゞむ。

果してソクラテスの道は死の道か。愚かなる権力者の道が生きる道か。いづれが正しい道かを知る者は誰ぞ！

沈黙の胸に声あり、この声を聞く者、いくばくぞ。この声を聞く世界、我らはこれを信とよぶ。

哲人ソクラテスは愚なる権力の前に死刑になるのだ。

弟子のクリートが、牢から逃げよとすすめた。

「私に逃げよと言うのか。私は半世紀の間、法律に従順であれと説いてきた。今になつて一生の誓を捨てよというのか。私は長い間、市民としての特権と自由とを享受してきた。しかるに今死刑の宣言を受けたからとて、死を恐れて法律を破り、愛するアテネの街を後にして逃げよというのか。私は私の言を破ることはできない。」

いつまで行つても二つの道はない。二つの道のない者には迷いはない。

年一回のにぎやかなお祭の日、市民が安価なる歡樂の空気に踊り狂う日に、不朽の大哲人は死んでゆく。

彼は常に変わりはない。女をさけて男子の友人にとりまかれつゝ、正義を語ることに変わりはない。彼は入浴して体を清めた。死の床は用意されてある。彼は毒薬の杯をとりあげた。そして気軽ののんだ。友人たちが泣いているのを平気で、なぐさめなだめて、立つて部屋の中を歩く。

「少し足がおかしくなった。」

毒杯を与えた獄卒は、

「どうぞこちらへ寝て下さい。」

老体は死の床に横たわる。手足の色が変わる。もものあたりが冷たくなる。

この毒が心臓まで来れば、それでおしまいだ。

沈黙……

墓場のような静けさ、それがまた破れた。

「クリートよ。私はいつか、アスクレピアスににわとり鶏を一羽借りておつた。あれを忘れて

いた。返してくれないか。」

間もなく彼の平和な呼吸はたえた。

偉大なる死よ。

一切を捨てて真理の殿堂にかけ登った哲人の強さ。

我らはこの精神の一片をでも我らの一生に織り込みたい。